

連載コラム



第 55 回 冬の樹木



もとよし ふさお  
本吉 総男

2020 年 2 月

樹木とは何でしょうか。広辞苑には「立木。木」としか説明がありません。ブリタニカ国際大百科事典は、「<sup>もくほん</sup>木本性で多年生の種子植物のなかで、主幹が側枝より大きく成長し、二次肥大する植物の総称（以下略）」と定義しています。樹木というと、ケヤキ、クヌギ、スギのような高木がまず頭に浮かびますが、アジサイ、キイチゴ、ナンテンのような小さな木も樹木という定義に当てはまるようです。実際に、北村四郎（補）・岡本省吾（著）「原色日本樹木図鑑」（保育社）には、それらの低木も含んでいます。

以上の定義では、樹木は<sup>もくほん</sup>木本（すなわち木）と同義になります。木本は<sup>もくほん</sup>草本（すなわち草）の対語で、科学的には、樹木より<sup>もくほん</sup>木本の方を多く使います。しかし「冬の<sup>もくほん</sup>木本」では何か情緒がないような気がします。したがって、タイトルは「冬の樹木」にしました。

樹木は春、夏、秋と、それぞれに風情があるのですが、冬にはまた、それなりのよさがあります。今回は、前年に咲いた花の名残、冬の散策にみる冬の花、常緑樹の紅葉、春を待つ芽や花の<sup>つぼみ</sup>蕾、木の枝で越冬する虫を宿す枝や幹など、冬にしか見られない樹木の姿を述べてみます。

## 1 花の名残

みずき野3丁目に沿って取手市戸頭に向かう道はユリノキの並木道です。ユリノキは5~6月頃花を咲かせますが、高木で葉がよく茂るので、花はなかなか見られません。ところが、葉がすっかり落ちてしまった冬になって、花が咲いた証拠が見つかりました。実の一部が枝についていたのです。ユリノキは花が咲いたあと、<sup>へんべい</sup>扁平で細長い<sup>み</sup>実が重なり合って多数つきますが、この時期には大部分の<sup>み</sup>実はすでに風によって飛散し、少数の<sup>み</sup>実が残っているだけでした。後日、再度この道を歩いたところ、非常にたくさんの花をつけたと思われる木を見つけました。



ユリノキに残された実 1月上旬  
みずき野3丁目（戸頭方面への並木道）



たくさんの花をつけたと思われるユリノキ  
1月下旬 撮影場所は同左

ユリノキは花がユリに似ているので名付けられた名で、英語ではチューリップの花に似ているとしてチューリップ・ツリーと呼ばれています。参考までに、上野の東京国立博物館の庭園で撮ったユリノキの花の写真を添えておきます。



参考：ユリノキの花 5月上旬  
上野の東京国立博物館庭園

さくらの杜公園の北の入り口近くにヒメシャラの木があります。花は6~8月頃咲き、秋には実が熟し、5片に裂け、中から種子が放出されます。空になった実は冬も枝についたままです。



ヒメシャラに残された実(種子は放出されている)  
1月上旬 さくらの杜公園



ヒメシャラの花  
6月中旬 さくらの杜公園

## 2 冬に咲く花

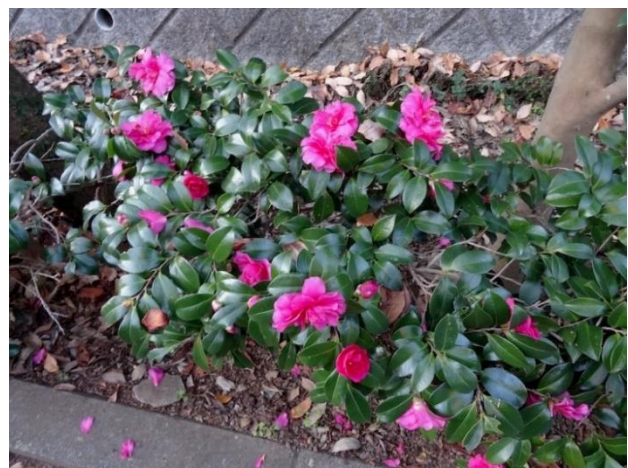
ヤツデは12月頃花を咲かせます。植物の多くは、同じ株に咲いた花どうしでの受粉をなるべく少なくするいろいろな工夫を行っています。例えば、雌雄異株しゅういしゅ しゅうどうしゅや雌雄同株めばなの植物では、雌花めばな（雌しべだけが発達する花）と雄花おばな（雄しべだけが発達する花）を別々につけます。雌雄異株とは、雌花めばなだけをつける株と雄花おばなだけをつける株が別々に存在すること、雌雄同株とは、ひとつの株めばな おばなに雌花と雄花が別々につく植物を指します。また、両性花りょうせい か（発達した雌しべと雄しべをもつ花）をもつ植物の中には、自家不和合性じ か ふわごうせい（雌しべが同株からの花粉によって受精することを拒絶する）や雌雄異熟しゅういじゅく（雌しべと雄しべの成熟時期をずらす）によって同株の花による受精を防いでいることがよくあります。これらは、多様な性質を持つ子孫を作り、それらの中から少しでも生存や繁殖に有利な個体を残すための植物の工夫です。



ヤツデの花(両生花だが雄花が先熟する)  
12月中旬 みずき野5丁目スイミングスクール北側

ヤツデの花は同株の花の間での受精を少なくする手段として、雌雄異熟しゆういじゆくを行っています。ヤツデは両性花りようせい かをつけますが、雄しべが先に成熟ゆうせいせんじゆくします(雄性先熟)。この時期には、花に5枚の花弁がついています。雄しべから出た花粉は、昆虫によって運ばれ、役目を終えると散ってしまい、次に雌しべが成熟します。この時期には花弁は散ってしまっています。花はやがて実になり、実は成熟すると黒くなります。

カンツバキはみずき野の遊歩道などにたくさん植え込まれている丈の低い植物です。花は八重咲きで紅色～濃いピンク。別名はシシガシラ。サザンカによく似ていますが、由来ははっきりしません。一般にサザンカに近縁ちんげんと思われるのですが、植物学者、北村四郎は油茶ゆちや(中国中南部原産、主として油を採るために栽培される)とツバキの雑種ではないかと推測しています。



カンツバキ(品種:獅子頭)  
12月上旬 文化財公園石垣下

サザンカと名札のついた木がみずき野の公園や遊歩道にあります。カンツバキとよく似た紅色～濃いピンクの八重の花を多数つけ、カンツバキより高く、冬に最も目立つ植物です。私はカンツバキに由来するサザンカの品種かんじろうで、勘次郎たちかんまたは立寒と呼ばれている品種か、あるいはそれに近い品種ではないかと思っています。



サザンカ 1月中旬 みずき野5丁目ざくろ公園

チャはツバキやサザンカに近縁の植物で、花は10月頃から咲き始め、冬季にも見られます。花は白くて小さいですが、形はツバキに似ています。いうまでもなくチャは主として製茶のために栽培されますが、庭木や生垣にも用いられます。



チャの花と実 11月下旬 取手市上高井地区

イチゴノキはヨーロッパ原産のツツジ科の植物で、日本では最近園芸植物として栽培されるようになりました。11月下旬～12月にアセビやドウダンツツジに似た花を咲かせますが、1月になっても花が見られます。イチゴノキの名は、秋にイチゴに似た赤くて丸い果実をつけることに由来します。第2調整池の花壇には、イチゴノキが1本植えてあり、初冬にはたくさんの花をつけます。しかし、実がなったかどうかは確認していません。



イチゴノキ 12月上旬 第2調整池花壇

### 3 常緑樹の紅葉

落葉樹は晩秋～初冬に一斉に落葉しますが、常緑樹は時期を限ることなく、古くなった葉が順次落葉します。落葉したのち、新しい芽ができて生長し、常に緑を保ちます。常緑樹も種によって、特に冬の間の一部の葉が紅葉することがありますが、紅葉した葉が落葉するとは限らず、春になると緑色に回復するものが多いようです。下の写真は冬に紅葉している常緑樹の葉です。



ナンテン 1月中旬  
みずぎ野3丁目東隣接地



ヒイラギナンテン 1月下旬  
みずぎ野中央公園



モッコク 1月上旬  
さくらの杜公園

## 4 春を待つ冬芽<sup>とうが</sup>

冬の散策では、樹木の冬芽<sup>とうが</sup>（越冬し、春になると生長して茎や葉を生じる）や未熟な花の蕾<sup>つぼみ</sup>を見ることができます。それらを見ると、春の到来を待ち焦がれる木々の思いが伝わってくるようです。

ユキヤナギは1月中旬にはまだ硬い冬芽<sup>とうが</sup>をつけていましたが、1月下旬には芽吹き始めていました。早くも春の到来を感じたようです。

ドウダンツツジは春に咲く花も、秋の紅葉も美しい植物ですが、冬はあまり気づかれなけれども、真っ赤な冬芽<sup>とうが</sup>が観察できます。

郷州里山（第2調整池北隣接地）にはトチノキが何本か植えられています。木は若いけれども、大きな冬芽<sup>とうが</sup>が目立ちます。枝のつき方も、両腕を挙げて万歳をしているような姿がユーモラスです。



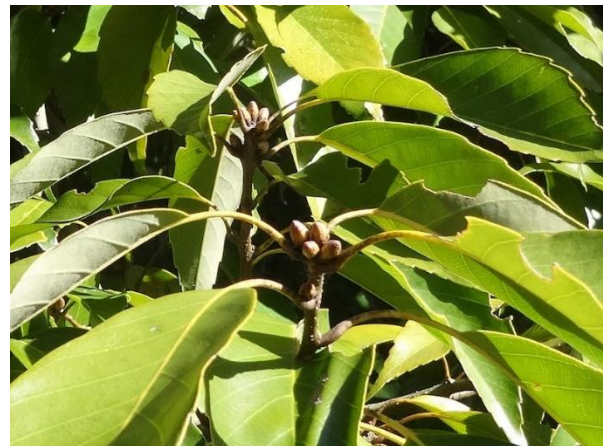
ユキヤナギの芽吹き始めた冬芽  
1月下旬 みずき野8丁目



ドウダンツツジの冬芽  
1月中旬みずき野5丁目



トチノキの冬芽  
1月上旬 第2調整池北（郷州里山）



アラカシの冬芽  
1月下旬 さくらの杜公園

常緑樹のアラカシも冬芽をつけて春を待ちます。冬芽は数個集まっています。これらがどのように生長していくか、観察を続けてみようと思っています。

## 5 <sup>か が つぼみ</sup> 花芽と蕾

<sup>か が</sup>花芽は一般には「はなめ」と読みますが、将来は花となる芽のことで、<sup>つぼみ</sup>蕾は花が開く前の状態のものをいいます。みずき野のシンボル、ハナミズキやさくらの杜公園に多いソメイヨシノは冬季に<sup>か が</sup>花芽が目立ちます。

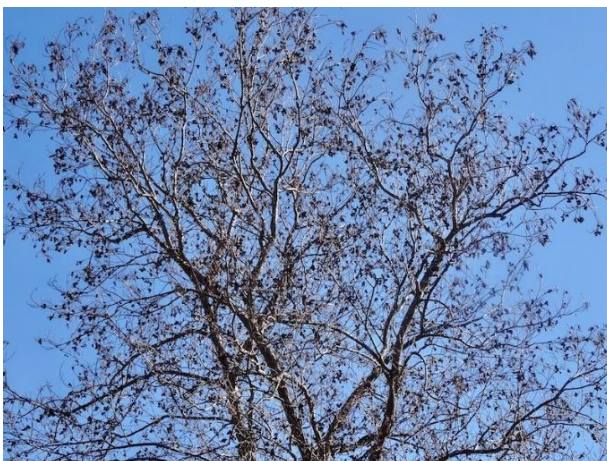


ハナミズキ の花芽  
2月上旬 さくらの杜公園



サクラ(ソメイヨシノ)の花芽  
2月上旬 さくらの杜公園

<sup>か が</sup>ハンノキの花芽は集まって房になっています。ハンノキは雌雄同株で、雄の花芽の房は尾のように垂れています。雌の花芽は目立ちませんが、雄花の房の後ろに見られます。松かさ状のものは、一年前に咲いた雌花から発達した古い実で、種子をすでに放出したのちの姿です。



冬のハンノキ  
1月中旬 みずき野3丁目東隣接地



ハンノキの花芽の房

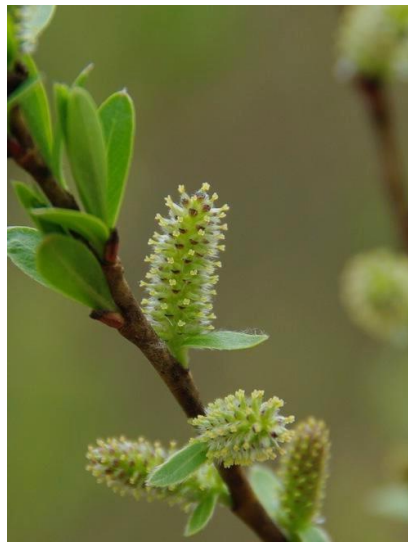


花芽の房をつけた冬のカワヤナギ 1月中旬  
みずき野3丁目東隣接地

みずき野周辺の湿地には、カワヤナギをよく見かけます。カワヤナギは雌雄異株の植物です。冬季にはこの植物の雌花も雄花もそれぞれ集まって房を形成しています。この季節には未熟の房が白く輝いて美しく見えます(左下が花芽の房の拡大写真)が、外観では雌花の房か、雄花の房かは識別できません。3月の開花時期になれば、雌花と雄花ははっきりわかります(下の右2枚がそれぞれ開花したときの雌花と雄花の写真)。



1月中旬の花芽の房



雌花の房 3月中旬



雄花の房 3月中旬

ウメより遅く、サクラより早く咲くコブシやモクレンは、2月初めには蕾をつけ、いち早く開花の準備をしています。なお、次ページの写真のサラサモクレンはモクレン(シモクレン)とハクモクレンの交配によってつくられた品種です。





コブシの蕾 2月上旬 みずき野7丁目



コブシの花 3月中旬 守谷市本町地区



サラサモクレンの蕾 2月上旬  
守谷駅西口広場



サラサモクレンの花 3月下旬  
守谷駅西口広場

守谷市の北園森林公園を散策していたら、1本の大きなキリの木が目に入りました。青空を背景に美しい枝が広がっています。冬は花芽が房状<sup>かが</sup>についており、晩春から初夏に花が咲きます。



冬のキリの美しい枝ぶり  
2月中旬 守谷市北園森林公園



花芽と2裂して  
種子を放出した  
あとの古い実



キリの花  
4月下旬 守谷市北園森林公園

## 6 樹上で越冬する虫たち

カマキリは木の枝に卵を生みつけます。卵はらんのう卵らんしょう囊うまたは卵らんしょう鞘うと呼ばれる泡状の分泌物（固まっている）によって保護されています。卵らんしょう囊うの形はカマキリの種しゆによって異なっています。ここではオオカマキリの卵らんしょう囊うを写真で示します。卵らんしょう囊うがついている木はイヌコリヤナギ。赤い花芽も春を待ちます。



オオカマキリの卵囊  
2月上旬 守谷市本町地区

以前はよく木の枝にイラガの繭まゆを見つけたのですが、最近はほとんど見かけなくなりました。イラガの繭まゆは小鳥の卵のような形で、白地に黒い縞模様しやれが洒落ています。樹種は思い出せませんが、多分クヌギと思います。近頃は繭まゆだけでなく、イラガの幼虫や成虫もほとんど見る事がなくなりました。これはイラガと同様、樹上に生息する外来種ヒロヘリアオイラガが近頃大発生することから、競合に負けてしまったこと、やはり外来種のヨコヅナサシガメが大量発生して、イラガの幼虫の多くが殺されてしまったことが原因と考えられます。



イラガの繭 1月中旬  
守谷市北園森林公園

イラガの幼虫は毒針を持ち、うっかり触るとひどい痛みを感じます。私もイラガの幼虫に触れたことがあって、その時の痛みは今でも忘れません。ですが、イラガは在来種なので、数が極端に減ってしまったことは残念です。

ウスタビガはヤマユガ科に属し、大型で黄色の美しいガですが、成虫は守谷市内でもまだ見たことがありません。しかし、繭まゆがたまに木の枝



ウスタビガの繭 1月中旬  
守谷市北園森林公園

にぶら下がっているのをみることがあります。<sup>まゆ</sup>繭は長い袋のような形で、美しい緑色をしています。樹種は思い出せません。

アカメガシワの枝にぶら下がっているミノムシを見つけました。「みの」の中に入っているのはオオミノガの幼虫です。雄も雌も「みの」をつくるので、写真の「みの」の中にはどちらが入っているかわかりません。

以下はミノムシに関して、私が実際に観察したわけではなく、文献によって調べたものです。

ミノムシは大変不思議な虫で、雄は4~5月頃さなぎ蛹になり、6月頃羽化してガになり、「みの」から出てきます。雄の成虫は翅があつて飛ぶこと

ができます。雌はやはりさなぎ蛹になったのち成虫になりますが、<sup>はね</sup>翅も<sup>あし</sup>脚も触覚もなく、頭や胸は小さく、卵がいっぱい入った大きな腹部を持ち、「みの」の中で蛹の殻の中に閉じこもっています。「みの」の先端に自ら隙間をあけ、フェロモンを発して、雄を引き寄せます。受精も「みの」の中で行います。卵を蛹の殻の中に生み終わると、雌の腹はぺちゃんこになりますがしばらくは生きているようです。雄は交尾後に死にます。

昆虫の中には成虫で越冬するものもたくさんいます。カメムシの多くも成虫で越冬します(第53回「カメムシの仲間」参照のこと)。今年(2020年)1月3日にケヤキの幹に生えたノキシノブ(シダの一種)に止まっているクモヘリカメムシを見つけました。寒いのでじっとしています。



オオミノガのミノムシ  
1月下旬 みずき野8丁目東隣接地

#### クモヘリカメムシの越冬 みずき野7丁目

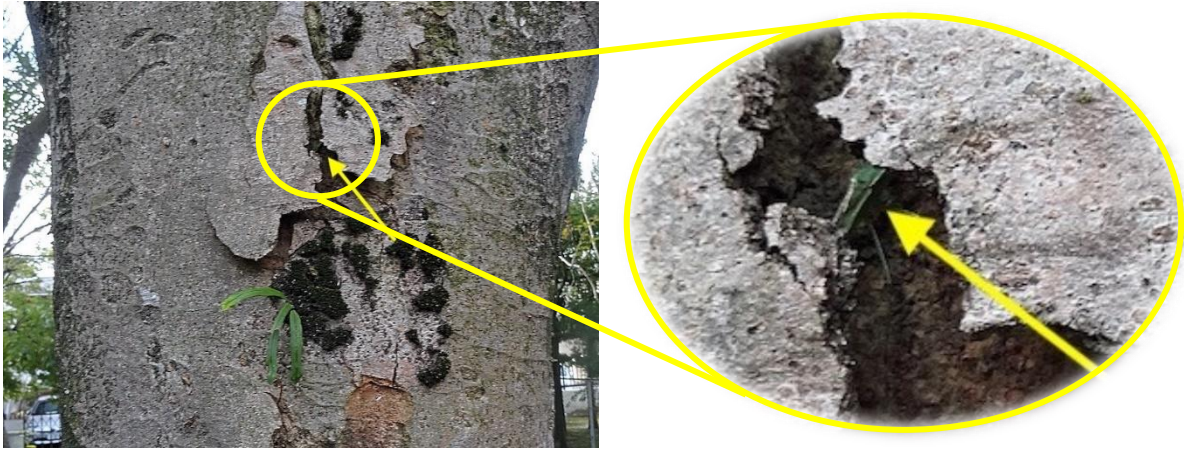


1月3日 ケヤキの幹に生えている  
ノキシノブに止まっていた



1月11日 少し上に移動していた

1月11日にカメムシがどうしているかを調べるため同じ場所に行ってみました。ノキシノブから少し外れた場所に移動していました。さらに2月4日、クモヘリカメムシが無事か、再度現場に見に行きました。いました。前にいた場所より上の、はがれた樹皮の下にいました。ここなら安心して越冬できそうです。



2月4日 樹皮の割れ目の中にいた

冬の散策は味気ないものと思いがちですが、ここまで述べてきたように、この季節ならではの風物がたくさん見られます。ここに載せたものよりもっといろいろなものが見えてくると思います。そんな視点で、春がくるまで、しばらくは冬の林の散策を続けたいと思っています。